

アスペルガー障害のロールシャッハ反応 に関する一事例研究

児童学科 高橋裕子

抄録：アスペルガー障害（Asperger's disorder: ASP）とは、DSM-IVにおいては高機能広汎性発達障害（high-function pervasive developmental disorder; HFPDD）の下位障害に分類されており、1944年にアスペルガーが報告した自閉症の中でも比較的言語発達が良好なタイプを指す。この障害の特徴として「社会的相互作用の質的障害」があるが、高い能力を有しながらも社会適応が困難である点、本人も周囲もこの質的障害を正しく認知し、適切な対応や支援を求めることが難しい点は、社会的な次元の問題であると同時に、障害の個人差を見極めにくいことが関与している。

本稿では、成人後にアスペルガー障害であると診断された女性のロールシャッハ反応に現れる特徴を形式構造解析の観点から検討し、援助の手がかりとした事例を報告する。

キーワード：高機能広汎性発達障害、アスペルガー障害、ロールシャッハ・テスト、

I. はじめに

近年、高機能広汎性発達障害（high-function pervasive developmental disorder; HFPDD）に対する関心が高まっている。高機能とは、知能指数（intelligent quotient: IQ）が70以上で知的な遅れがなく、広汎性とは、「社会性」、「コミュニケーション」、「想像力」の3領域にわたって障害を有することを意味する。広汎性発達障害（pervasive developmental disorder; PDD）とは、アメリカ精神医学会による「精神障害の診断・統計マニュアル第4版（DSM-IV）」の診断基準による分類であり、下位障害として、一般には自閉症と称されている「自閉性障害（autistic disorder: AD）」、その他に「レット障害（Rett's disorder: RED）」、「小児期崩壊性障害（childhood disintegrative disorder: CDD）」、「アスペルガー障害（Asperger's disorder: ASP）」「特定不能の広汎性発達障害（pervasive developmental disorder not otherwise specified: PDDNOS）」の5つがある。

アスペルガー障害とは、1944年にアスペルガー

が報告した自閉症の中でも比較的言語発達が良好なタイプを指し、1981年、Wingが軽症の自閉症に注意を喚起する目的で再評価したことから再び広く知られるようになり、DSM-IVでは「社会的相互作用の質的障害」とであると定義され、「社会的、職業的あるいは他の重要な機能の領域において臨床的に明白な障害を引き起こす」とされている。コミュニケーション能力に関しては「2歳までに単語が使用され、3歳までに意思伝達的な句を使用するとされる」こと、認知能力発達または年齢相応の社会習慣技能、適応行動（社会的相互作用以外）、および環境への興味の小児期における発達に臨床的に明白な全般的な遅れはない」ことが診断基準として挙げられている。また、1996年にWingが「自閉症スペクトラム」という概念を提唱したことから、アスペルガー障害を自閉性障害における程度の差異や知的障害の有無など個別の疾患単位としての分類が可能ではあるが、それらを連続体として捉える見解も提示されている。

本稿では成人後にアスペルガー障害であると診

断された女性のロールシャッハ反応に現れる障害の特徴を検討する。

II. 事例

1. 生育歴

公務員の父、専業主婦の母、「何か勉強中」の20代後半の兄との4人家族。幼少時からアトピー性皮膚炎があり、小学校高学年時に全身の湿疹が出て皮膚科を受診し、以後進学後などに増悪する既往歴がある。父は躰に厳しく、体罰を与えることもあった。小学校低学年時、母を殴るところを見て「お母さんを（お父さんが）殺すかもしれない」と思って怖くなり、「自分のお父さんはいない」と思うことにした。小学校高学年時、塾から帰って遅く食事をしたら、父と顔を合わせなくて済むことに気づき、以来家の中で顔を合わせないように生活している。

小学校では仲の良かった友達が次々と転校してしまい、中学校では、課外活動を始めたが上下関係があり、2年生になると後輩に教えなくてはならないのがつらくて辞めてしまった。中学高校とも理科が好きであったため、理系の短大に進学したが、専攻した内容は苦手だった。卒業研究の担当教員からよく思われていないのではないかが気になり、四年制大学への編入も考えたが、結局しんどくなって辞めた。卒業後は1ヶ月ほどアルバイトをしたが、わからないことを訊くと「甘えないように」といわれてつらかった。歯科通院時、担当医と意思疎通ができないこと、母親から仕事や勉強など何かするようにと言われることなどを契機に短期大学卒業2年後に精神科を受診した。

2. 治療経過

外来で精神科医の診察を受け、「気持ちや身体がしんどい」「人とあまり緊張しないで話をしたり、あまり気にしないで何かできるようになりたい」と言い、小学校以来、友人や父との喧嘩を契

機に人と話すのが嫌になったと訴えたことから、自己評価式抑うつ性尺度（Self-rating Depression Scale: SDS）を施行し、その結果からも当初は対人恐怖を伴った「うつ状態」との診断の下に心理療法を開始した。以後、主治医の診察と筆者の担当する心理面接とを並行して関りを継続した。

受診後、いくつかの相談機関に相談をしたが、ある機関では年齢を聞かれたことから「電話してはいけない気がして」相談をやめたり、「20年それでやってきたのだからそのまま続けたら」と励まされたことを語っている。また、精神科への受診はずっと考えていたが、「差別や偏見があるので行けなかった」とのことであった。

数回の診察および面接経過中に、対人恐怖や周囲への被害感情の存在は確認できたが、面接の始めに「いかがですか？」と問うと、「どう答えればいいんですか」と全く返答を思いつかず困惑しているようであったり、「先生（主治医）に悪く思われているんじゃないですか」と問う根拠が「私が話し終わる前に喋ったりするから」という理由であるなど、その独特の意味付けに対してアスペルガー障害である可能性を疑った。そのため、診断と治療方針を再検討することを意図して心理検査を行う提案をしたところ、「他のことに使わないか」などいくつかの質問が出され、筆者が逐一それらに回答した後了解を得られたため、ウェクスラー成人知能検査（Wechsler Adult intelligence Scale-Revised: WAIS-R）とロールシャッハ・テストを2週続けて面接時間に行った。検査時、被検者は「話をしてもあまりかわらない。役に立たないので検査をしたい」と検査に期待を持っている様子であった。尚、以下のロールシャッハ・テストのスコアリングは阪大法による。

3. ロールシャッハ・テスト

Table 1 にプロトコール、以下にスコアリングを示す。

1) R=33 RT=13'23" RT(Av.)=24.3"

$R_1T(Av.N.C.)=7.8''$

$R_1T(Av.C.C.)=6.3''$

$RC(Av.)=1.57''$

$RC(Av.N.C.)=2.23$

$RC(Av.C.C.)=1.15$

(Ⅷ～Ⅹ) % = 39.4%

- 2) Location: $W=15(45.4\%)$,
 $D=14(42.4\%)$, $d=1$, $dr=1$, $Sc=1$
- 3) Determinant: $F=25(75.7\%)$, $FY=6$,
 $FC'=1$, $FC=1$, $CF=2$,
- 4) Form Level: $F+=24(72.7\%)$,
 $F-=9(21.3\%)$ organization(h:l:d:n=
0:2:0:8)
 $AQ=64$
- 5) Content: $A+Ad=17(51.5\%)$,
 $H=4(12.1\%)$, $Plt=2$, $Crown=1$,
 $Fire=1$, $Clothing=1$, $Mus=1$, $Imp=$
 1 , $RC=1$, $Tr=1$, $Smoke=1$
- 6) Sentence Type: $AS=33(100\%)$

4. その他の心理検査

(1) SDS

初診時、主訴の詳細を調べるために施行された。20項目の評価点合計は62点、うつ病群(53～67, 平均値60)のなかでも重篤な状態であると考えられる。生理的随伴症状の平均は2.6点、心理的随伴症状の平均は3.4点と心理的な自覚症状がより深刻である。心理的随伴症状を問う10項目に関しては、精神運動性興奮が最低点であった以外は、6項目が最高評価点である4点、3項目が3点であった。

(2) WAIS-R 成人知能検査 (Wechsler Adult intelligence Scale-Revised)

$IQ=95$, 言語性 $IQ=106$, 動作性 $IQ=80$

言語性検査においては「類似」が評価点17で最高値(評価点1～19)を示し、次いで「知識」12, 「算数」「理解」10, 「数唱」9, 最も評価点の低かったのは「単語」7であった。観察・比較を

行う力に比べて、それを表現する手段がやや劣るが、ばらつきは小さい。動作性検査では評価点がいずれも10を下回り、言語性IQよりも動作性IQの低い結果となっている。動作性検査においては「組み合わせ」9が最高点で、以下「積木模様」「符号」8, 「絵画配列」7, そして「絵画完成」6の評価点が最も低かった。「絵画完成」は状況を読み取り、脈絡を整理する問題であるため、他者とともに同一状況を体験しても、共通認知・理解を持ち得ない経験が日常生活に多数起こっているものと考えられた。

Ⅲ. 考 察

1. ロールシャッハ・テストにみられる特徴

(1) 把握型

外輪郭をはっきりと完結して示さず、一部分の手がかりから全体を決定してしまうこと、部分的な説明で全体を指し示したかのようにしてしまう反応が大半を占める。これは、空間や色彩によって明瞭に図版が部分化されているときには一部を抽出できるという被検者の状況依存的な認知的特徴を示している。即ち、認知する対象の側に被検者にとって明白な手がかりがあれば、それを利用することのできるレベルの適応力を備えていると言える。

ひとつの物体を示す完結した枠組みとして外輪郭を使用することはほとんどなかったが、部分的な輪郭の細かな凹凸に対して、「フワフワ」としているという質感を伴う表現が2ヶ所認められた。図版において質感に結びつく要素としては、色彩・無色彩の濃淡が最も一般的であり、この「フワフワ」という叙述は、平面の限界を意味する輪郭を内的には触感という別次元の感覚へと発展させている可能性が示唆される。このような独特な感覚の飛躍、あるいは他者と共有しにくい表現方法が日常的に認められるものと考えられる。

平均初発反応時間が色彩図版よりも無色彩図版において長いことは、色彩が異なるという明白

な手がかりをもとにして図版を認知し、反応産出する方が容易であったと同時に、色彩を持つ、単彩よりもより刺激の強い図版に反応を誘発されたことを示している。しかし、反応数が極端に増加し、反応促進と捉えるべき反応数の差は認められないことから、時にアスペルガー障害が伴っている知覚過敏の特徴を持つものではないと言える。

(2) 体験型

1) 決定因

反応総数の 87.9% が形体によるものであり、色彩や濃淡に言及している箇所もあるが、色彩を有効に形体と複合して反応産出しているとはいえない。形体という最も明白な事実を事実どおりに認知することに大きな歪みはないと言えるが、先の色彩に関する複合不全に加え、運動反応に関しては動感覚すら全く認められなかった。これは、形体を認知した上で自身の内面に起こる運動感覚を 2 次元の図版に投影して運動反応を産出する内的作業ができなかったことを意味している。周囲に起こる出来事や人に対して社会的に適切な感情を向けたり、相手の情緒を推察するなど、自らが枠組みとなる主観を基準にせざるを得ない場面で混乱が生じ、対象とは距離をおき、情緒的な関わりを回避する臨床象につながる。

2) 形体水準・結合反応

F+ が 72.9% であり、現実検討力全般には大きな問題はない。ただし、外輪郭が曖昧なものを対象の中に見出すことは IX カードの「煙」のみであった（ただし、この場合も「原爆の時の雲」と説明しているので、識別形体とスコアされる）ことから、具体物を対象とした範囲での現実検討力であると考えられる。結合反応に関しては、二つの概念の関係性が漠然と示されたものが 20%、概念同士の関係性が示されなかったものが 80% であった。有意義な結合反応が産出されなかった反面、不合理な結合反応もなく、事実を恣意的に操作したり、関係付ける傾向は認められなかった。

3) 反応内容

動物反応が 51.5%、人間反応 12.1% であり、対人的な興味の希薄さを読み取ることができる。その他の反応では、何かに固執することなく生活範囲の中で思い浮かぶ具体物の領域内で比較的自由に反応を産出している。

4) 文章型

全て AS 型 (assertive sentence; 言い切り型) であり、漠然図形である対象に主体的に関わり、何かになぞらえて見ているという間接性の認識に欠ける表現に終始した。このような自らの行動における微妙なニュアンスを意識しない直接性、あるいはそれを表現し得ないコミュニケーション・スキルに、年齢相応の発達を成し得ていない側面が現れている。

2. 発達的な観点から見たロールシャッハ反応の特徴

(1) 把握型

ロールシャッハ・テストにおける発達的に重要な指標として、識別的な外輪郭形体による図版の部分を用いた反応、即ち正確な対象把握の定着を示す「初期集約的把握型」が挙げられる。対象を正確に把握するための全体から部分への把握型の移行は、対象の境界を認識し、その重要性に気づくこと、また自他の境界を意識する自我の確立と表裏をなす関係だからである。これは即ち、学習姿勢の最初の定着年齢である小学校高学年と一致している。年齢的な発達課題からすると、被検者は自我の確立や個性化の課題とこれから取り組む段階にあるといえる。

(2) 体験型

色彩図版における平均初発反応時間の明らかな遅れも発達的には重要な指標となる。小学校高学年以降では、目立ちやすく、直接的・即座的な反応を促す刺激に対して、よく考え、即座に行動することのマイナスに気づくようになったことにより、この傾向を示すと考えられている。本事例に

においては、無色彩図版の平均初発反応時間がより長く、逆の結果となっており、外在する刺激に促されるままに反応している。また、初期集約型の把握を通過していないために、形体と色彩との複合、運動反応の産出、有意義な結合反応の増化などが認められないと考えられる。

小笠原らは成人のアスペルガー障害におけるロールシャッハの特徴に関し、①細部の認知は比較的正確であるが、部分と全体との関係の整合性が不問にされ、反応としての均質性の保たれていない反応が多数認められる、②図版状況を継時的・実況中継的に羅列するため、反応単位の分離独立が不十分なものが多い、③有意義な結合反応はほとんど認められず、時として不合理な結合表現が見られる、④色彩・運動感覚ともに形体との間で複合不全を呈している、という4つの特徴を挙げている。本事例の場合は、①の部分と全体との関係の不整合な傾向、③の有意義な結合反応が少数である点、④の特徴は認められるものの、①の反応としての均質性が保たれていないものが多数存在するという点と②の特徴は有していない。本事例との共通性をアスペルガー障害の特徴としてまとめるならば、部分と全体あるいは2つ以上の概念同士の関係性を明示できず、色彩・運動反応とも複合に失敗する反応が多数見られることがあると言える。尚、本事例との相違は、小笠原らの事例はいずれも男性の被検者であったが、本事例は女性の被検者であったこと、年齢や生活環境・生活経験の相違や検査者－被検者関係などが反映されているとも考えられる。

3. 心理検査後の治療経過

検査を行った後、総合所見として主治医には以下の内容を提出した。

「明らかに病的な反応は認められなかったものの、対象認知は状況に依存した形で行われることが多く、表面的で適切な情緒を伴うものではない。ただし、具体的な手がかりにはほぼ適確に応じる

ことができることから、限られた範囲での日常生活では大きな混乱や失敗の起こる可能性は低いと言える。しかし、抽象的な物事への理解は極めて困難で、独特の解釈や意味付けが行われる場合があることから、他者と感情や物事への解釈を共有しにくく、一般妥当性を持つ情緒体験をしているとは考えにくい。しかも、被験者の内面ではそれが絶対となっており、他の可能性を受け入れる余地がほとんどなく、そのために対人場面を回避するか、関係が表面的なものに終始せざるを得ない状況に陥っている。

このような認知や行動様式を変化させることは、慣れた手がかりをある意味では手放すこととなり、被験者には大きな抵抗感を喚起するものと思われる。現在の日常生活における安全感が保てる中でこのような認知構造に働きかけを行い、自身の認知や意味付けに対するフィードバックを少しでも行えるようになることが望まれる。

上記の働きかけの有効性には、日常生活を変化させる意欲への動機付けがどの程度であるかが関係するが、動機という抽象的なものを媒介にすることは恐らく困難であるため、具体的な変化の目標を共有して治療を進めるなどの工夫が必要であることが考えられる」

被検者にはこの所見をく周りの状況を比較的に正確に捉える観察力はあるが、前後の脈絡を読み取ることなどは苦手。例えば、相手の話す声の調子が変わったことが自分に怒っているのではないかと感じて、しんどくなってしまうことがある>とひとつ目の特徴を面接中の様子に関連づけ、簡単にまとめて口頭で伝えた。すると、「前後って何かわからない」と説明に用いた語句への質問と「検査を受けても変わった気がしない」という感想が述べられた。確かに検査は被検者には直接役に立つものではなかったかもしれないが、治療側が援助の方向性を確認するためには有効であった。臨床的な印象が検査によって裏付けられたことから、主訴に述べられた対人的な技術を磨くた

めの治療セッション内での SST（社会生活技能訓練；Social Skills Training）を提案し、また保護的な環境下で実際に他者と接する経験を持つために、地域の精神障害者を対象とした地域支援センターや自閉症の当業者会などへの参加を勧めた。母親はあまり賛成していなかったようではあるが、本人は「ここにも自分が来たくて来ているので」と見学や問い合わせを行い、現在はその中から自身が気に入った機関に通所中である。現在も尚、対人的な状況把握は非常に独特で、待合室で隣に男性が座ると「あの人は私に気があるのですか」と病院のスタッフに確かめたりすることはあるが、友人ができて外出の機会も増え、家族との関係も少しずつ捉えなおし始めているところである。

IV. まとめと今後の課題

アスペルガー障害をもつ女性のロールシャッハ反応に関する検討を行い、① 形体認知は比較的正確であるが、初期集約型の把握を通過していない、② 形体と色彩との複合不全、③ 有意義な結合反応の産出不全、④ 運動反応の欠如などの特徴が認められた。

ただし、これらの特徴は、アスペルガー障害に限らず、精神病水準、パーソナリティ障害水準、思春期青年期危機にある被検者等にも認められるため、更に事例を重ねて質的な差異を検討する必要があると考えている。

<引用・参考文献>

- American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (4th ed.). APA, Washington, D.C., 1994. (大野裕)
- 市川宏伸：高機能広汎性発達障害の現在，臨床精神医学 33(4): 421-427, 2004.
- 小林隆児，財部盛久：アスペルガー症候群の治療－心理社会的アプローチを中心に－，精神科治療学 14(1): 53-57, 1999.
- 鍋田恭孝：対人恐怖症の今日の問題，臨床精神医学 33(4): 363-370, 2004.
- 小笠原将之，竹内直子，川口裕子，補永栄子，福永知子：成人のアスペルガー障害のロールシャッハ反応，日本ロールシャッハ学会第 8 回大会，2004.
- 瀬戸屋雄太郎，長沼陽一，長田洋和，高橋美紀，渡辺友香，栗田広：WISC-R によるアスペルガー障害およびその他の高機能広汎性発達障害の認知プロフィールの比較，精神科治療学 14(1): 59-64, 1999.
- 辻悟：ロールシャッハ検査法－形式・構造解析に基づく解釈の理論と実際，金子書房，1997.
- 辻悟：ロールシャッハ・スコアリング阪大法マニュアル，金子書房，1999.
- 十一元三：広汎性発達障害と前頭葉，臨床精神医学 32(4): 395-404, 2003.
- Wing, L.: The autistic spectrum. A guide for parents and professionals. (自閉症スペクトル，親と専門家のためのガイドブック，久保絃章，佐々木正美，清水康夫訳，東京書籍 1998.)

Table 1 ロールシャッハ・プロトコール
Rorschach protocol

図版 反応時間	回転	自由反応段階	質疑段階
I 23"	△	① 虫 ＜他には？＞えっとこの方向から 見て？＜どちらからでも自由に＞	ここ(D ₅)頭で羽(D ₃)。＜どんな虫？＞…＜ど んな種類？＞じゃあ蛾 W, F, F+p, , , A, AS
51"	<▽>	② 冠	ここの部分()。＜どうなってる？＞上で、 下の部分が頭。＜どうして冠だと？＞形。
59"	▽	それくらいです	WSc, F, F+, , l, Crown, AS
II 54"	△▽△▽	① 蜂	頭(D ₄)、羽(D ₁ ×2)。＜どうして蜂だと？＞ この部分が顔に見えたから W, F, F-, , , A, AS
1'06"	△	② コウモリ	それは羽の部分(D ₁ ×2)で。＜羽以外は？＞ ここが頭(D ₄)で。＜コウモリらしいと思っ たのは？＞色。 W, FC, F+o, , , A, AS
1'34"		③ 悪魔	目(D ₃ ×2)、口(S)。＜どうして悪魔だと？＞
1'53"		そのくらい(図版を差し出す)	何となく。(W), F, F-, , , C, (H), AS
III 56"	△	① 人？	頭(d ₁)、足(D ₄)。＜どうして人だと？＞形。 ＜男の人？女の人？＞女の人。＜どうして？＞ 形。 D, F, F+p, , , H, AS
1'14"	▽ △	② ムシ 絵の全体を見て答えるんですか？ ＜自由にみてください＞	頭(D ₅)、身体(D ₆ 外輪郭)、足(D ₄)＜どんな 虫？＞小さな虫。＜どのあたりから？＞大き な虫でこういう感じはないですから。 W, F, F+, , , A, AS
2'13"		③ 火の玉	この部分(D ₁)が。＜どうして火の玉だと？＞ 形と色。 D, FC, F+, , n, Fire, AS
2'18"		④ リボン	ここ。＜どうしてリボンだと？＞形 D, F, F+p, , , Clothing, AS
IV 24"	△	① 兎？	耳(d ₂)、目(上方内部)。顔だけ＜どうして兎 だと？＞この辺(D ₃)がフワフワッとしてい て。 W, FT, F-, , Ad, AS
1'01"	▽<△	② 靴	この部分(D ₃)が長靴に見えました。＜どう して長靴だと？＞この部分が靴に見えた。 Dd, F, Fo, , n, Clothing, AS
1'12"	<△	③ 鳥	ここ、頭(D ₁)で、羽(D ₃)。＜どんな鳥？＞ 小さな鳥。＜どうして小さな鳥だと？＞顔が、 頭の部分が丸いから。 W, F, F+, , , A, AS
1'20"	▽	④ ムシ	これも(③と)同じように頭と羽。＜どんな虫？ ＞…小さい虫。＜形がどうなってるの？＞こ この部分(d ₆ 突起部)が触角に見える W, F, F-, , , A, AS
1'24"			
V 32"	△▽>△ <△	① 蛾	羽(D ₁)、頭(d ₁)。＜蛾らしいところは？＞ 形 W, F, F+p, , , A, AS
52"	<	② オオカミ	顔(D ₁)、耳(D ₁ 上方突起部)。＜何匹？＞2 匹。＜どうしてオオカミだと？＞ここが口に 見えた。 D, F, F+, , n, Ad, AS
58"			
VI 24"	▽	① 楽器	弦楽器に見えたんですけど、このあたり(D ₂) が弾くところで、持つところ(D ₁)。＜どん な楽器？＞バイオリン。＜どうしてバイオリ ンだと？＞形 W, F, F+, , , Mus, AS
33"	>△<△ <	② 電気	電気のスタンド(D ₂)かな、と。＜電気のス タントらしいところは？＞形 D, F, F-, , , Imp, AS
1'01"	>△>	③ 包丁	ここ(D ₅)が切るところ、持つところ

1'25"			(1/2D ₁)。<どうして包丁だと?>形。 Dd, F, F+o, , , Imp, AS
VII 6"	△	① 狐	顔(D ₃), 手(d ₁ , d ₃), 胴体(D ₄)。<どっち向き?>こっちが鼻(D ₁ 外側)。<どうして狐だと?>ここが顔に見えて。あと, フワフワとしている。(外輪郭をなぞる)<何匹いるの?>2匹。 D, FT, F-, , n, A, AS
50"	> ∨ < △	② パズル	ひとつひとつがパズル。<何個あるの?>6個。<どうしてパズルだと?>欠けていたり, 出っ張っていたり。
1'09"		(黙って手渡す)	W, F, F+o, , n, RC, AS
VIII 17"	△	① 魚	こっちが頭(D ₄)で, しっぽ(下方)。<どんな魚?>魚の名前で言うんですか?<わかれば>カレイのような。<どうして魚だと?>形。 W, F, F+o, , , A, AS
24"	>	② 動物	頭, 足。(D ₁)<どんな動物?>爬虫類。<どうして爬虫類だと?>形。
46"	∨	③ お化け	W, F, F+p, , , A, AS 顔(D ₄ 以外), 目(D ₈ ×2), 口(D ₃)。カボチャのお化けに似ている。<どうしてカボチャのお化けだと?>お化けの顔に見えた…
1'02" 1'07"	> △	④ 花	(W), F, F-, , , Gohst/Hd, AS ∨この部分が花びらに見えた。<どうして花だと?>色と形。 W, FC, F+, , , Plt, AS
IX 24"	△ ∨	① ロケット	ここが先で, 地面。<ロケットはどれ?>この部分。<どうしてロケットだと?>このあたりの煙と形。 dr, F, F+o, , l, Tr, AS
37"	△	② 煙	原爆の時の雲に似ていた。<どの辺り?>(外輪郭をなぞる)<どうして煙だと?>形とこの辺りがモコモコしているから。
57"		(黙って差し出す)	W, FY, F+o, , l, Croud, AS
X 14"	△	① 人	(D ₁)顔, 手, 足。<どんな人?>ピエロ。<どうしてピエロだと?>帽子に見えた。
26"		② 犬	<何人?>2人。 D, F, F+, , n, H, AS 顔, 頭。<他には?>身体。<どうして犬だと?>ここ(外輪郭)がフワフワしていて, ここが顔に見えた。 D, FY, F+, , , A, AS
1'03"	> ∨ > △	③ 葉っぱ	これ。<どうして葉っぱだと?>色と形。 D, CF, F+o, , , Plt, AS
1'20"		④ ウサギ	頭, 身体。<どうして兎だと?>耳。全体が長い感じ。<何匹?>2匹。
	< ∨ < △	⑤ 蟹	D, F, F-, , n, A, AS これとこれ。<どうして蟹だと?>この辺りが蟹の足に見えた。 D, F, F+o, , n, A, AS
2'07"	< ∨ △	⑥ りす	頭, 足, しっぽ。<どうしてりすだと?>この辺(輪郭内側)がフワフワしていて, 形がりすに似ている。 D, FY, F-, , , H, AS
2'10"		⑦ タツノオトシゴ	頭, 身体。<どうしてタツノオトシゴだと?>この形がそれに似ているから。<何匹?>2匹。 d, F, F+, , , H, AS
		(差し出す)	

Like card: X (即答) この犬が何となく可愛い

Dislike card: II 色と形。この赤色とかこの辺(下方)の形

Self image card: VII この10枚で選んだら, これになる

Father image card: I この10枚で選んだら, これになる

Mother image card: IX 色合い, 形。<どんなイメージ?>何があるかわからない

A Rorschach Study of an Asperger's Disorder

Osaka Shoin Women's University
Yuko TAKAHASHI

ABSTRACT

The purpose of this paper is to examine peculiarity of Rorschach test score of Asperger's disorder (ASP). ASP is classified subcategory of high-function pervasive developmental disorder(HFPDD) in DSM-IV, and this type that is originally reported by Asperger in 1944 has comparatively less problem in verbal development. This disorder is characterized "disorder in social reciprocal relation".

This paper reports a female adult case of Asperger's disorder and discusses about her Rorschach test score from the viewpoint of form-structure analysis.

Key words: high-function pervasive developmental disorder, Asperger's Disorder, Rorschach test,